

呉智英さん

(評論家)

中国の「思想的台頭」をどう見るか？

急速な経済発展とともに「大国」としての影響力を強めてきた中国。その中国ではないま、欧米流の民主主義に対抗して、儒教などを基礎に置く「アジア的価値観」の普遍化が模索されているという。儒教文化に詳しい呉智英さんに、その背景などを聞いてみた。

ナショナリズムと結びつく儒教思想

——呉さんは論壇デビュー作の『封建主義者かく語りき』（双葉文庫）で、無前提に信じられている民主主義や人権思想への根源的批判を展開し、その矛盾を解決する道として「封建主義」の復権を唱えられました。それから三十年ほどが経って、世界も日本も様変わりし、いまは大国となった中国で、呉さんが唱え続けたのと同じようなことが言われるようになりました。たとえば昨年末の朝日新聞（十二月十二日付）でも大きく取り上げられた対外強硬派の代表的論客、閻学通氏な

どは、現代中国のパワーに儒教思想を結びつけ、「アジア的社会思想」で西欧社会に対抗しようと模索しています。こうした動きをどう見えていますか？

そうした動きの背景にはね、いくつかの要因があるんですよ。この閻学通さんなんかもそうですが、現在の支那の場合ほとくに、ナショナリズムの高揚の一環として儒教などの古代思想が取り上げられる傾向がある。要は、思想でも制度でも何でも、重要なものはみんな自分たちのところにもともとあるのであって、なにも西洋から輸入する必要はない、われわれはもともと大文明国であり、それがいまの世界にも通用するんだということを言いたいわけです。

それと、もうひとつは二十世紀が終わり、二十一世紀が始まって、世界的に旧来の思考パラダイム（枠組み）が無効になりかけている。西洋人のほうからも「脱構築」なんてことが言われていて、旧来の価値観をいったん解体して考えるべきだとする声が上がっているわけです。解体して次に何が出てくるかということとは、明確に言える人がいないんだけど、ともかく

解体しなきゃいけない、いまの価値観を疑わなきゃいけないという考え方が強まってきた。そんなときに、アジアのほうには、いまの価値観に代わり得る何か有用な思想がありそうだということに気づいている人が何人かいて、彼らの言説によって儒教などが注目されると、それがまた増幅されて支那の知識人やナショナリズムを勢いづける。こうした動きになっているわけです。

——しかし、西欧的な価値観の行き詰まりから東洋思想や東洋文化が見直されるというのは、いまに始まったことではないですかね。

そうですね。たとえば後藤末雄という人の『中国思想のフランス西漸』（平凡社東洋文庫）は戦前に書かれた本なんですが、この本なんか読むと、歴史を通じて西洋人が東洋の文明や思想をどう発見してきたかというところが、ずいぶん詳しく語られています。

現代に限ってみても、とくに戦後の場合はハーバード大学教授の杜維明（とゐめい）という人をはじめとする在米支那人の新儒家の動きがあります。この人たちは、たとえば近代化した社会ではその社会を機能させるには法律をもっと整備しなきゃいけないけれど、それよりも人心を涵養するようなことによって社会がうまくいくん



●くれともふさ（「ちえい」も可）一九四六年愛知県生まれ。早稲田大学法学部卒業。八一年の論壇登場以来、民主主義や人権思想への根源的批判を展開し、言論界の後継世代に大きな影響を及ぼす。評論活動の傍ら、大学で講師を務め、論語講義の私塾を開き、日本マンガ学会会長なども歴任。著書に『現代人の論語』『知の収権』『バカにつける薬』『賢者の誘惑』『危険な思想家』『つぎはぎ仏教入門』『王天降明と』『共同幻想』などがある。

■呉智英氏が中国を「支那」と呼ぶ論理的根拠については、著書『ホントの話』（小学館文庫）所収の論文「支那を『支那』と呼んで何が差別なのか」や趙宏偉・法大助教授との対談「『支那』か『中国』か」などをご参照ください。